

## 1998年台風7号による奈良の文化財被害

西山 要一 (奈良大学文学部文化財学科)

1998年9月22日に近畿地方を縦断した台風7号は、近畿6府県の国・府県指定文化財に多大の被害をもたらした。昨年9月末日の近畿各府県教育委員会の緊急集計によると、奈良県117件、大阪府48件、兵庫県13件、京都府44件、滋賀県39件、和歌山県19件のあわせて280件の被害が報告されているが、その時点では、天然記念物や石造物群、また、市町村指定文化財の被害は集計されていず、さらに、未指定ではあるが貴重な文化財の被害を含めると、その被害数は膨大なものであったと想定される。

奈良県では、春日大社の東回廊(重文)の倒木による破損、靈山寺三重塔(重文)の倒木による破損、薬師寺東塔(国宝)の壁の剥落、石上神社拝殿(国宝)大棟の破損、長谷寺(重文)全建物の瓦や樋の破損、法隆寺西院回廊(国宝)の屋根や東大寺築垣屋根(国宝)の破損、当麻寺の東西の両塔(国宝)の屋根の破損、百濟寺三重塔(重文)の露盤や瓦の破損、室生寺五重塔(国宝)の倒木による破損、金峯山寺本堂(国宝)屋根・壁の破損などの89件の建造物に被害があった。これらは国指定建造物件数の25%・棟数の17%にあたる。他に栄山寺石灯籠(重文)の倒木による倒壊など、美術工芸品またはその保存庫の被害4件、吉野山の桜(史跡・名勝)160本の倒木、玉置山の杉の巨樹群(県指定天然記念物)常立杉の倒壊、春日山原生林(天然記念物)の倒壊など、史跡・名勝・天然記念物の被害が15件などである。また、その後、箸墓古墳や室宮山古墳のように墳丘上の樹木が倒れて根に絡まって埴輪が現れる被害も多く報告されている。

文化財の被害は、強風による直接的損害とともに、強風によって倒れた木による間接的損害が大きかった。奈良地方気象台(奈良市)は、台風7号の中心が大阪府から奈良県北西部を通り滋賀県にあった午後3時すぎに最大瞬間風速37.6m/sの南南西の風を記録している。室生寺では、西側の谷筋を駆け上がった強風が更に風速・風力を増して多くの樹齢数百年の杉の大木をなぎ倒して五重塔の屋根と相輪を破壊し、同寺の奥の院御影堂は幸いに僅か数メートルの差で難を逃れた。春日山原生林でも西からの暴風により数えきれない多数の樹木が倒れ、春日大社では、杉の倒木が東回廊の屋根を直撃、また、西回廊では大木の枝が落下し檜皮屋根を突き破った。三輪大社の御神体三輪山では、稜線の形が変わってしまう程に樹木が倒れた。杉はもともと根が浅いうえに、岩盤上のごく薄い土壌に根を張っていて風に弱い樹木といわれるが、近年の酸性雨などの大気汚染が、杉をはじめとする樹木の毛根を傷め、葉を落とし、遂には樹木の立ち枯れ倒壊をまねく、樹木の衰退とも無関係ではないだろう。